

Title	モダリティ論から見た「~と思う」
Author(s)	宮崎, 和人
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 33 P.1-P.16
Issue Date	1999
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/56559
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

モダリティ論から見た「～と思う」

宮崎 和人

キーワード：モダリティ ムード 引用文 思考内容 「と思う／と思っている」

1. はじめに

動詞「思う」は、「認識する」といった語彙的意味を有することから、「ダロウ」等の文法的な意味として「認識」を表す表現類との関係が問題になる。従来のモダリティ研究でも、引用節（「～ト」）を取った「思う」がある条件の下で概言形式相当の働きをするという指摘がなされることがある（寺村（1984）、仁田（1991）等）。例えば、

(1) 犯人は彼だと思う。

のような、スル形（完成相・非過去・肯定形）で一人称主体が省略されている場合の「と思う」は、「ダロウ」に近似しているとされる。

ところで、「と思う」が概言形式化する条件としては、もう一つ付け加える必要がある。例えば、

(2) 犯人は彼ではないかと思う。

(3) この仕事は今日中に終わらせ |よう/たい| と思う。

のような「と思う」については、概言形式相当といった性格づけは無理である。つまり、引用節に有標的（marked）な判断や表出の形式が出現しないという条件が必要である。

いずれにしても、従来のモダリティ研究における「と思う」の扱い方としては、「と思う」それ自体をモダリティ相当表現として分析するという

ことが一般的であったと思われる。これに対して本稿が取る立場とは、「と思う」の付加が文におけるモダリティの現れをどのように規定するかという視点から「と思う」の機能を探るというものである。

2. 「と思う」の引用節は命題か？ — 「不確実表示用法」の検討

2. 1 引用文としての「～と思う」

中右 (1979) では、文が命題とモダリティから成るとする議論において、「と思う」をモダリティ表現と認定している。これによれば、

(4) a. [明日は晴れる]_pだろう。

b. [明日は晴れる]_pと思う。

のように、「～だろう」と平行的に、引用節が命題に相当するような構造が「～と思う」に想定されることになる。

さて、「と思う」の引用節は、(5) のように、聞き手めあてのモダリティ要素を含むことはできないが¹⁾、(6) のように、事柄めあてのモダリティ要素は含みうる。

(5) *ねえ、座りなさいよ、と思う。

(6) 明日は晴れるだろうと思う。

つまり、「と思う」の引用節は、命題に加えて、事柄めあてのモダリティ要素を含むだけの容量があると言える。そこで、問題の立て方としては、「と思う」の引用節は、常に、事柄めあての意味までを含んでいると見做すべきか、それとも、事柄めあての意味を含むこともあれば、命題止まりのこともあり、「と思う」がモダリティとして機能するのは後者の場合に限定されると見做すのか、ということになるだろう。つまり、「と思う」の引用節の文法的な性格について、検討を加えておく必要がある。

「～と思う」を引用文として検討した研究として、砂川 (1987) がある。砂川は、引用文を、典型的な引用文、「～と思う」型の引用文、「～と見え

る」型の引用文の三つに類型化し、それらの構造と機能の違いを「場の二重性」という概念を用いて説明している。すなわち、典型的な引用文とは、「もとの文の発言の場と当の引用文の発言の場という二つの場の、前者を後者の中に入れ子型に取り込むという形の二重性によって成り立っている文」であるが、「～と見える」型の引用文では、引用動詞は完全にムード形式化しており（「ラシイ」に相当）、二重の場の成立が見られない。そして、問題の「～と思う」型の引用文では、引用動詞は多分にムード形式化している（「婉曲のムード」）ものの、二重の場によって構成されている点では典型的な引用文と共通し、違いは、思考と発言という二つの場の主体と時点が同一である点にあるとしている。砂川の分析によると、「～と思う」は、典型的な引用文とは言えないものの、場の二重性を保持していることから、(4) bのような単文構造を持つには至っていないという位置づけになる。

本稿では、発言の場に思考の場を再現させたものであるという「～と思う」の引用文の性質から、その引用節は、聞き手めあてのモダリティ要素を含まないが、単なる命題でもなく、有標的な形式の有無に関わらず、必ず、事柄めあてのモダリティ要素を含んでいると考える。これは、思考という行為が聞き手に対してではなく事柄に対して行われるものであるということから導かれる、当然の帰結でもある。

そこで、これを踏まえて、(4) について解釈してみると、「ダロウ」の補文としての「明日は晴れる」は、推量判断の素材・対象として、一切の判断が加わる以前の事柄内容であるのに対して、「～と思う」の引用節としての「明日は晴れる」は、話し手の心内に浮かんだ思考内容であり、したがって、これ自体が既に一種の判断である、と把握されることになる。このことを、副詞「タブン」が共起した場合のスコープの違いとして示せば、

(7) a. [たぶん] [明日は晴れるだろう]。

b. [たぶん明日は晴れる] と思う。

のようになるのではないかと思う。

2. 2 「と思う」の二用法 (森山 (1992))

「と思う」の引用節の文法的な性格を考えるにあたって参照すべきもう一つの論考は、森山 (1992) であろう。森山は、「と思う」に二つの用法が存在することを指摘する。

(8) 先方は三時にくると思います。

(9) 日本の今の医療制度は間違っていると思う。

すなわち、(8) のような「不確実表示用法」と (9) のような「主観明示用法」を区別し、不確実表示用法の「と思う」は、それを取り除くと、事実としての文を言うことになり、質的な意味の違いを生じるのに対して、主観明示用法では、「と思う」を除いても、個人的な意見を述べることになり、質的な意味の違いを生じない。

(8') 先方は三時にくる。(≠ (8))

(9') 日本の今の医療制度は間違っている。(≡ (9))

そして、「と思う」の二用法の区別は、引用節が客観的情報を表示しているか、主観的情報を表示しているかの違いによるものであり、結局のところ、「と思う」の基本的意味としては、「個人情報の表示」という点でまとめることができる、としている。

森山が問題にしているのは、「と思う」の引用節の情報的な性格であり、文法的な性格ではないので、(8) の引用節が客観的情報であると言っても、必ずしもこれを命題相当と見做していることにはならないが、同一事象に対して確実性と不確実性を同時に表示できるはずはないから、(8) のような「と思う」が不確実性を表示しているとすれば、少なくとも、引用節自体は確実性に関する意味は含んでいないということになろう。ここで問題

になるのは、(8') の確実性の質についてである。これは、「事実としての文」なのだろうか。

2. 3 「スルと思う」「Nダと思う」

動詞の非過去形「スル」および過去形「シタ」は、アクチュアルな用法では、テンスとしては、それぞれ〈未来〉、〈過去〉を示し、ムードとしては〈断定〉を示す。ところが、未実現である未来の事象は、既実現である過去の事象と違って、そもそも、事実として確定したものとして認定することができないので、非過去形「スル」における〈断定〉のムードは、テンスと絡み合って、〈予定〉あるいは〈予断〉といった、確実性の十分でないあり方で実現するに止まる²⁾。

(10) 明日、注文していた品物が届く。(予定)

(11) 今年の夏はたぶん暑くなる。(予断)

森山が(8') について「事実としての文」と言っているのは、ここで言う〈予定〉のことである。また、(8) の引用節が含みうるムードは、言うまでもなく、〈予断〉であるから、(8) から「と思う」を除くと意味が変わるというのは、「スル」の意味を〈予断〉から〈予定〉へと読み替えているからであって、読み替えない限り、質的な変化はないことになる。

もちろん、(8') が単独で差し出された場合に〈予定〉の意味に読まれやすいということは言える。それは、主節においては、〈予定〉が〈予断〉に対して無標的 (unmarked) であるからであり、はっきりと〈予断〉の意味で読まれるには、「タブン」等の副詞が必要になるだろう。逆に、「と思う」の引用節中では、「スル」の意味は〈予断〉でしかありえないために、「タブン」等の必要度は弱くなる。つまり、(8) から「と思う」を除くと意味が変わるというのは、「と思う」がなくなることによって〈予断〉の読みを引き出す手段(「タブン」等) が別に必要になり、それが無い限

り、〈予定〉の読みが優先的に与えられることである。そこで、引用節のムード的意味が〈予定〉でなく〈予断〉であることを明示するというのが、(8)の「と思う」の当該文中での働きであるということになる。

同様のことが名詞述語文の場合にも言える。例えば、

(12) あの男はヤクザだと思う。

の「と思う」は、森山の分類では、不確実表示用法になるのだろうか、それとも、主観明示用法になるのだろうか。ここから「と思う」を除いた場合、質的な意味の変化はあるのだろうか。田野村(1990)は、次のような名詞述語文を例として、「知識表明文」((13))と「推量判断実践文」((14))を分別する議論を行っている。

(13) (君ハ知ラナイダロウガ) あの男はヤクザだ。

(14) (アノ風体カラスルト) あの男はヤクザだ。

このように、名詞述語「Nダ」における〈断定〉のヴァリエーションにも、(13)のような〈事実認定〉の他、(14)のような〈真偽判定〉があると言えよう。結局、この場合も、(12)から「と思う」を除いて意味が変わるとすれば、それは「Nダ」の意味を〈真偽判定〉から〈事実認定〉へと読み替えているからであり、読み替えない限り、「と思う」を除いても意味の変化はなく、したがって、ここでも、「と思う」は、引用節の「Nダ」が〈事実認定〉でなく〈真偽判定〉の意味であることを明示する働きをしていると解釈できることになる。

これらのケースについては、「と思う」は、確実なことから不確実なことへと意味を変えるために付加するのではなく、「スル」や「Nダ」という形態が〈断定〉のヴァリエーションとして担いうる二つの意味(「スル」なら〈予定〉と〈予断〉、「Nダ」なら〈事実認定〉と〈真偽判定〉)のうち、そのいずれが当該文において実現しているかを明示していると考えられる。そして、結局、これは、「と思う」の引用節は思考内容でなければ

ならないということに起因するムード的意味の制約に他ならない。

2. 4 「シタと思う」

このように、「と思う」の引用節述語が動詞の非過去形「スル」や名詞述語「Nダ」である場合には、「と思う」の働きをムード的意味の明示と考えることが可能であったが、過去形「シタ」に「と思う」が続く場合は、事情が異なる。断定形でありながら〈予断〉といった不確実性に対応する「スル」とは違って、「シタ」のムードは基本的に〈事実認定〉になるので、森山の言うように、「と思う」を除くことによって、不確実な文から事実としての文へと質的意味が変化すると言わざるをえないからである³⁾。

(15) 彼はもう帰ったと思う。

(15') 彼はもう帰った。

では、(15)の引用節は、「と思う」を付加されることによって、(15')に存在する〈事実認定〉のムード的意味を剥奪され、命題相当に成り下がっているのだろうか。

この問題に解答を与えるにあたって、次のような事例を参照しておきたい。例えば、次の二つの「ノデハナイカ」は、それぞれ、〈推測〉と〈確認要求〉といった違った意味を表示しているように見える。

(16) 君は少し働き過ぎなんじゃないかと思う。

(16') 君は少し働き過ぎなんじゃないか？

しかし、後者の〈確認要求〉の意味が、「ノデハナイカ」自体の事柄めあて的な意味（〈推測〉）に、終止用法であることによって聞き手めあて性が加わり、聞き手に向けて聞き手のことを推測することになることで、言わば、語用論的に生じるものであることは、言うまでもない⁴⁾。

同様に、聞き手めあて性のブロックされている「と思う」の引用節と、逆に聞き手への通達を前提とする主節とで、「シタ」の意味の実現のされ

方が最終的に異なってくるというのは、何ら不思議なことではない。つまり、「シタ」の持つ〈事実認定〉というムード的意味は、聞き手めあて性のブロックされている「と思う」の引用節においては、話し手限りのものとして、純粹に判断レベルに止まるのに対して、聞き手への通達といった側面が加わる主節においては、話し手内部での〈事実認定〉に、情報提供者としての責任において当該内容の事実性を話し手が聞き手に対して保証する⁵⁾ という、聞き手めあて性が加わったものとなると考えられる。

以上の議論の帰結として、文法的な性格という観点から、(15)の引用節は、単なる命題ではなく、話し手の思考内容として〈事実認定〉というムード的意味を含んだものであるが、聞き手めあてでないことによって、事実性の保証といった、(15')に認められる語用論的な含意が出ず、そのことによって、質的な意味の違いがあるように見える、とするのが整合的な解釈であると思われる。つまり、(15)の引用節と(15')とは、〈事実認定〉の意味を共通に有しており、前者では、それに「と思う」が付加されていることによって、〈事実認定〉が話し手限りの内的判断として成立していることが表示されているということになる⁶⁾。また、説明は省略するが、「シテイル」(未来を表す場合は除く)についても、ここで述べたことが当てはまるだろう。

3. 「と思う」の付加は意味を変えないか? — 「主観明示用法」の検討

3. 1 「と思う」と「ダロウ」の表現レベルの違い

「ダロウ」が心内発話や独り言として成り立ちうるのに対して、「と思う」が対話状況でしか使えないことは、仁田(1991)に指摘がある。

(17) (独り言として) 明日は雨が降るだろう。

(18) (独り言として) #明日は雨が降ると思う。

空を見上げて独り言を発する場合、(18)のように言うのは奇妙であろう。

「～と思う」は、話し手の思考内容を述べ立てる文である。ならば、それをそのまま独り言として言うことができないのはなぜだろうか。この問いには、ごく常識的に答えることができる。話し手の思考内容に対応する言語表現は引用節部分であるが、それが思考内容であることは、「と思う」自体によって表示されている。話し手が自己の思考内容を独り言として述べる時、それが思考内容であるということを自分に向けて殊更に表示するのは無意味なことである。

このように、「と思う」は、それ自体は思考内容の構成要素ではなく、引用節の内容が話し手の思考であることを外側から注釈する表現であるが、一方、「ダロウ」は、それ自体が思考内容の構成要素であり、

(19) 明日は雨が降るだろうと思う。

のように、「と思う」の引用節に埋め込むことができる、というように、両者は、次元の異なる言語表現なのである。したがって、(19) と、それから「と思う」を除いた、

(19') 明日は雨が降るだろう。

とは、表現レベルの点で大きな異なりがあるはずであり、そのことが、一方は対話状況でなければ使用できず、他方は独り言でも使える、という違いに反映していると考えられるのである。

3. 2 表出文+「と思う」

森山 (1992) では、(19) のような「と思う」の用法を主観明示用法と見做し、「と思う」を除いても質的な意味に違いはなく (意味差があっても文体的な効果にすぎず)、いずれも個人的な意見を述べるものであり、ここで「と思う」は個人的な意見を個人的なものとして明示するという意味であると見ている。確かに、(19) と (19') の意味差は、不確実表示用法の場合に比べれば微妙であるが、森山が同じく主観明示用法とする

ものでも、(20) のような文から「と思う」を外した時の意味差は、非常に大きく、文体的なレベルに止まるものではないだろう。

(20) 今年の夏は海外旅行に行こうと思う。

(20') 今年の夏は海外旅行に行こう。

ここで、(20) と (20') の違いを確認するなら、まず、〈誘い掛け〉にも使えるのは後者だけだという違いがあるが、〈意志〉を表す文としても、後者が話し手の意志をその場で直接表出する文であるのに対して、前者は話し手が予め心中に抱いている意向を予定として聞き手に伝える文である⁷⁾、という違いがあると言える。その証拠に、「今年の夏は何をするの?」という質問に対する応答としては、(20) が選択されるだろう。

〈希望〉を述べる場合にも、これと同様のことが言え、この夏の海外旅行が予定として決まっている場合には、(21) のように、「と思う」を付けた言い方をするのが普通だろう。

(21) 今年の夏は海外旅行に行きたいと思う。

(21') 今年の夏は海外旅行に行きたい。

また、(20') が〈誘い掛け〉の文としても使えるように、(21') も、自己の希望の実現を聞き手に働き掛ける文として機能しうる。例えば、子供が親に海外旅行に連れて行ってと要求する場合には、(21') のように言うだろう。一方、(21) は、そういう使い方はできない。

このように、いわゆる表出型の文に「と思う」を付加すると、話し手の心的な情意と聞き手との接触面がなくなることによって、聞き手の意向を考慮せずに一方的に話し手の心づもりを通達・宣言する文になる。そして、

(22) 乾杯したいと思います。

のような、司会者の発言に見られる「と思う」も、「個人的な意見であるということから自ら断ることで、主張を控えめにする」(森山(1992))というよりは、むしろ、会合を進行する権限を与えられた司会者ならではの通

達・宣言的な言い方と捉えられはしないだろうか⁸⁾。

さらに、表出型の文に「と思う」が付加されることによって、表現のタイプが大きく変わることの反映として、

(23) 明日は映画 |を/??が| 見たいと思う。

(23') 明日は映画 |を/が| 見たい。

のように、「と思う」の付加が格表示に影響を与えるといった現象を指摘できる。これは、(23) が「と思う」の付加によって表出性を失っていることを示していると思われる。また、感情形容詞文に「と思う」が付加できないのも、同様の現象であろう。

(24) *とてもうれしいと思う。

なお、話し手の感情が「思う」によって述べられないわけではなく、

(24') 彼に会えたら、とてもうれしいと思う。

(24'') とてもうれしく思う。

のように、仮定条件の帰結や終止形以外の用法では、表出性は出ないので、感情形容詞と「思う」は共起できる。

表出文における「と思う」の付加は、発話・伝達のモダリティ（仁田(1991)）を〈表出〉から〈述べ立て〉へ変更する操作に他ならない。

3. 3 「ダロウと思う」

以上のように、表出型の文においては、「と思う」の付加はかなりの意味の変化をもたらすわけだが、これに対して、既に見たように、「ダロウ」の文においては、それが顕著でないように見えるのはなぜだろうか。

(25) 明日は雨が降るだろうと思う。(= (19))

(25') 明日は雨が降るだろう。(= (19'))

それは、「ダロウ」自体が思考内容の構成要素であり、主節においても聞き手めあて的な語用論的含意が生じず、また、「と思う」の付加による発

話・伝達のモダリティの変容もない（いずれも〈述べ立て〉）、ということによると考えられる。

しかしながら、ここでも、表現性の変質は、もちろん皆無ではない。

(26) 雲が厚くなってきたね。#まもなく雨が降るだろうと思う。

(26') 雲が厚くなってきたね。まもなく雨が降るだろう。

この二文の対比から分かるように、状況に基づき、その場で推量するような場合には、「と思う」の付加は困難となる。この事実、発話・伝達のモダリティの変容はないものの、「と思う」の付加によって、思考内容そのものを差し出す文から思考内容を内省して伝える文へと、表現レベルの変更が生じていることを意味している⁹⁾。「ダロウ」で言い切った場合には、その場で新たに成立した思考を表すことができるのに対して、これに「と思う」を付加した場合には、先んじて心中に存在する思考をモニターして述べることになると考えられる。

3. 4 評価・価値づけを表す文+「と思う」

次のような例も、森山（1992）の言う主観明示用法であり、確かに、「と思う」の有無が意味の違いにほとんど反映しないように感じられる。

(27) この本はなかなか面白いと思う。

(27') この本はなかなか面白い。

(28) 今の学生はもっと基礎を勉強すべきだと思う。

(28') 今の学生はもっと基礎を勉強すべきだ。

これらは、最初から事実性（真偽）が問題にならない文であると言える。まず、(27') について言えば、本の面白さは、読む人が決めればよいことであり、最初からその本の絶対的な属性として定まっているものではない。また、(28') も、実現するかしらないかではなく、実現することが望ましいかどうかを問題にした言い方である。こうした評価や価値

づけを表す文は、断定形が用いられているとしても、聞き手に対する事実性の保証といった含意はまったく生じない。また、言うまでもなく、発話・伝達のモダリティの変更もない。

4. 引用節内容の真偽値 — 「と思う」と「と思っている」の違い

ここで、従来しばしば問題にされてきた「と思う」と「と思っている」の違いについても触れておきたい。

「と思う」と「と思っている」の違いとして最も重要なのは、人称制限の有無であるが、「と思う」は、主語が一人称であればよいというわけではない。例えば、

- (29) #私はそのことが間違っていると思う。|そして、それは事実間違っている。/本当は間違っていないのだが。|

のような例は、一人称主語であっても許容されない。「と思う」は、引用節の内容の真偽が決定している場合には使用できない。一方、三人称主語を取る「と思っている」には、この制約はない。

- (30) 彼はそのことが間違っていると思っている。|そして、それは事実間違っている。/本当は間違っていないのだが。|

さらに、注目すべきは、「と思っている」では、真偽が決定していても使用可能であるということに止まらず、むしろ、積極的に偽であることを含意するということが少なからずあるということである。例えば、

- (31) 彼は今日が金曜日だと思っている。

のような文では、文脈抜きでも、引用節の内容が偽であって、つまり、主体（「彼」）が事実と反する認識を持っているということが意味される。一人称主語と共起できないのも、そのためである。

- (31') *私は今日が金曜日だと思っている。

こうした「思っている」は、言わば、「思い込んでいる」に相当する意味

を表示していると言えるだろう。

また、「と思っている」には、次のような用法が成立する。

(32) (亡くなった親友について) 僕はあいつはまだ生きていますと {#思う/思っている}。

この例のように、「と思っている」は、一人称主語を取りながらも、引用節の内容が明らかに偽である状況での使用が可能な場合がある。こうした「と思っている」は、「(事実と関係なく) そう見做している」という意味で用いられていると言えるだろう。一方、「と思う」には、そういう使い方がない。

このように、「と思っている」の文は、現実を主体が主体なりに「どう解釈しているか」という基本的な意味を持ち、そのために、引用節の内容の真偽が確定している場合でも使用できるのである。さらに、

(33) 僕は阪神が優勝すると {思う/思っている}。

のように、真偽不明なことを言う場合にも、「と思う」を使えば単純な予想という意味に止まるのに対して、信念や強い期待といったニュアンスが「と思っている」に込められることがある。

5. おわりに

「と思う」の付加とは、要するに、文の思考内容化であり、本稿は、思考内容としてのモダリティのあり様についての考察であったとも言える。モダリティのあるものは思考内容化を拒絶し、あるいは機能的に制約を受け、逆に、事柄めあて的な意味を純化させる。そして、そのことが「と思う」の有無による意味の違いとして現象化するのであった。

そして、もう一つ重要なことは、「と思う」は、「ダロウ」の位置する階層の外側であって、思考内容を対象化（モニター）して通達するといったレベルの表現であって、思考内容そのものの表現である「ダロウ」とは表

現レベルが異なるということである。一方、三人称主語を許容し、引用節内容の真偽値と無関係に使用できる「と思っている」は、思考行為自体を対象化する表現であると言える。

注

- 1) ある条件の下で聞き手めあて性が発動する表現も、「と思う」の引用節に入ることによって、聞き手めあて性は封じ込められる。例えば、「明日、床屋に行こうと思う。」は、〈誘い掛け〉ではなく〈意志〉でしかありえない。なお、過去形「思った」では、「その時、私は「明日天気になあれ」と思った。」のように、命令形を含んだ引用節が成立するが、こうした命令文は、仁田（1991）が述べるように、既に願望表現化したものである。また、藤田（1985）では、終助詞類（「ナ・ゾ・ワ」）が問題なく生起するとされているが、これも過去形についての指摘であると思われる。非過去形「と思う」の引用節には、「ナ（ア）」（あるいは「カ」）くらいしか取まらないのではないか。
- 2) 「スル」「シタ」の認知的意味の類型については、宮崎（1991）で詳述した。また、〈断定〉のヴァリエントについて記述した仁田（1997）も参照。
- 3) ただし、「もうちょっとがんばれば勝てたと思う。」のような、いわゆる反事実的条件文においては、「シタ」であっても〈真偽判定〉になるので、「と思う」を除いても、質的意味の変化はない。
- 4) したがって、当該情報が聞き手知識でない場合には、終止用法であっても、「この分じゃ、明日は雨が降るんじゃないか。」のように〈推測〉に止まる。
- 5) これは、端的に言えば、事実と違っていた場合に「嘘をついた」ことになるということである。
- 6) 「確か、彼もあの場にいたと思う。」のような、記憶の再生といった用法も、話し手内部での〈事実認定〉といった意味として適切に説明できる。
- 7) その点で、「ツモリダ」に近づいていると言える。
- 8) 「#乾杯したいです。」と言うのはいかにも不自然であるが、これは、「と思う」を付加していないことによるのではなく、そもそも聞き手への通達を目的としない表出文に丁寧さの分化が起りにくいからではないかと思われる。
- 9) この点に関して、安達（1997）が「ダロウ」に「表出」という伝達的な特徴を認めているのが注目される。これによれば、「ダロウ」についても、発

話・伝達のモダリティの変更があるということになる。

参考文献

- 安達太郎 (1997) 「「だろ」の伝達的な側面」『日本語教育』95
- 藤田保幸 (1985) 「「内的引用」における話法の転換について — 話法転換の a 線 —」『語文』46
- 宮崎和人 (1991) 「判断のモダリティをめぐって」『新居浜工業高等専門学校紀要 (人文科学編)』27
- (1992) 「現代日本語の判定文について」『広島修大論集 (人文編)』32-2
- 森山卓郎 (1992) 「文末思考動詞「思う」をめぐって — 文の意味としての主観性・客観性 —」『日本語学』11-9
- 中右 実 (1979) 「モダリティと命題」『英語と日本語と』くろしお出版
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- (1997) 「断定をめぐって」『阪大日本語研究』9
- 砂川有里子 (1987) 「引用文の構造と機能 — 引用文の3つの類型について —」『文藝言語研究 言語篇』13
- 田野村忠温 (1990) 「文における判断をめぐって」『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

付 記

本稿は、第23回中部日本・日本語学研究会 (1999年7月10日、於三重大学) での発表の前半部分をまとめたものである。席上、多数のご意見を頂き、特に、藤田保幸氏のご教示によって内容の一部を修正できた。記して感謝申し上げる。

(岡山大学文学部助教授)